

## [ボタンの名称と機能]

### ① チャート選択ボタン

学力調査や質問紙調査の種類を選んで表示させるボタンです。プルダウンメニューになっています。

### ② 基準選択ボタン

チャートの基準を全国にするか都道府県にするかを選択するボタンです。プルダウンメニューになっています。

### ③ 領域等選択ボタン

学力調査の結果を表示するときに、学力の領域や回答の形式別にレーダーチャートを見るか、それとも、調査の設問毎に見るかを選択できます。

### ④ 項目選択ボタン

これを押すと、さらにその項目に関連する調査の設問の詳細な結果を見ることができます。

#### (4) 表示画面タイプ2のボタンの名称と基本操作

① 表示形式選択ボタン

② 学力層別表示ボタン

③ クロス集計表示ボタン1

④ クロス集計表示ボタン2

⑤ クロス集計対象選択ボタン

⑥ 回答タイプ選択ボタン

⑦ 設問表示ボタン

画面タイトル: 松竹梅小学校 年度 全国学力・学習状況調査 [松竹梅小学校]

ナビゲーションメニュー: 学力調査 ▼ 国語A ▼ 国語B ▼ 算数A ▼ 算数B ▼ 児童質問 1 ▼ 児童質問 2 ▼ 児童質問 3 ▼ 児童質問 4 ▼ 児童質問 5 ▼ 児童質問 6 ▼ 児童質問 7 ▼ 児童質問 8 ▼ 児童質問 9 ▼ 児童質問 10 ▼ 児童質問 11 ▼ 児童質問 12 ▼ 児童質問 13 ▼ 児童質問 14 ▼ 児童質問 15 ▼ 児童質問 16 ▼ 児童質問 17 ▼ 児童質問 18 ▼ 児童質問 19 ▼ 児童質問 20 ▼ 児童質問 21 ▼ 児童質問 22 ▼ 児童質問 23 ▼ 児童質問 24 ▼ 児童質問 25 ▼ 児童質問 26 ▼ 児童質問 27 ▼ 児童質問 28 ▼ 児童質問 29 ▼ 児童質問 30 ▼ 児童質問 31 ▼ 児童質問 32 ▼ 児童質問 33 ▼ 児童質問 34 ▼ 児童質問 35 ▼ 児童質問 36 ▼ 児童質問 37 ▼ 児童質問 38 ▼ 児童質問 39 ▼ 児童質問 40 ▼ 児童質問 41 ▼ 児童質問 42 ▼ 児童質問 43 ▼ 児童質問 44 ▼ 児童質問 45 ▼ 児童質問 46 ▼ 児童質問 47 ▼ 児童質問 48 ▼ 児童質問 49 ▼ 児童質問 50 ▼ 児童質問 51 ▼ 児童質問 52 ▼ 児童質問 53 ▼ 児童質問 54 ▼ 児童質問 55 ▼ 児童質問 56 ▼ 児童質問 57 ▼ 児童質問 58 ▼ 児童質問 59 ▼ 児童質問 60 ▼ 児童質問 61 ▼ 児童質問 62 ▼ 児童質問 63 ▼ 児童質問 64 ▼ 児童質問 65 ▼ 児童質問 66 ▼ 児童質問 67 ▼ 児童質問 68 ▼ 児童質問 69 ▼ 児童質問 70 ▼ 児童質問 71 ▼ 児童質問 72 ▼ 児童質問 73 ▼ 児童質問 74 ▼ 児童質問 75 ▼ 児童質問 76 ▼ 児童質問 77 ▼ 児童質問 78 ▼ 児童質問 79 ▼ 児童質問 80 ▼ 児童質問 81 ▼ 児童質問 82 ▼ 児童質問 83 ▼ 児童質問 84 ▼ 児童質問 85 ▼ 児童質問 86 ▼ 児童質問 87 ▼ 児童質問 88 ▼ 児童質問 89 ▼ 児童質問 90 ▼ 児童質問 91 ▼ 児童質問 92 ▼ 児童質問 93 ▼ 児童質問 94 ▼ 児童質問 95 ▼ 児童質問 96 ▼ 児童質問 97 ▼ 児童質問 98 ▼ 児童質問 99 ▼ 児童質問 100 ▼

現在の項目: 54 / 60 次の項目 >>

3(3) 品物を買えないわけを書く

2種類の品物を買うとき、与えられた条件では、ハンカチを買うともう1種類の品物を買えないわけを書く

学年	正答	不正	無解答
5年	34	9	0
6年	30	59	0
全体	29	68	2

以下は松竹梅小学校の結果.....

平成21年度 全国学力・学習状況調査

## [ボタンの名称と機能]

### ① 表示形式選択ボタン

表示された帯グラフを、パーセントや人数の表に変換して見たいときに押します。プルダウンメニューになっています。

### ② 学力層別表示ボタン

学力層別 (A・B・C・D) にグラフを表示したいときに押します。なお、ここでいう学力層とは、全国データを用いて教科別学力調査の各設問の正答率を基準として集団を上位層から下位層まで4等分割 (近似値) して作成したものです。プルダウンメニューになっています。

### ③ クロス集計表示ボタン 1

クロス集計をしたいときに、選択する設問 (項目) を指定します。プルダウンメニューになっています。全設問の前半です。

### ④ クロス集計表示ボタン 2

クロス集計をしたいときに、選択する設問 (項目) を指定します。プルダウンメニューになっています。全設問の後半です。

### ⑤ クロス集計対象選択ボタン

クロス集計を、自校の児童生徒のデータを使ってグラフで表示するか、全国データを用いてグラフで表示するかを選択するボタンです。

### ⑥ 回答タイプ選択ボタン

グラフの凡例を選択して表示するボタンです。プルダウンメニューになっています。左右の矢印ボタンでも操作できます。

### ⑦ 設問表示ボタン

このグラフに対応する学力調査の問題を表示するボタンです。

## 5.学力向上アクションプランの作成に活かす

では最後に、学力向上アクションプランの作成について理解を深めておきましょう。

### (1) 学力向上アクションプランの項目例と書き方

実際の学力向上アクションプランを掲載することができないために、望ましい項目例と書き方について10個のポイントで整理してみました。

- ① アクションプランをまず教科毎に作ることによって、教科特性に応じた、あるいは、その教科に固有な子どもの学力実態に応じたきめ細かい授業改善の方策を明らかにする。
- ② 教科における基礎基本の徹底だけでなく、B問題に対応した思考力・判断力・表現力を育てる活用学習のあり方を具体的に記入する。
- ③ 子どもの確かな学力の実態を幅広く診断して、次に教科学習だけでなく総合的な学習の時間の一層の充実の具体的な方法についても記述する。
- ④ さらに子どもの生活習慣・学習習慣・読書習慣・学習規律の向上を図る具体的な手だてを豊富にプランに記入する。
- ⑤ 子どもの学力課題に対応した校内研修と授業公開を軸とした教員の力量形成の方法をしっかりと計画する。
- ⑥ 保護者と地域の協力の下に、学力向上に資する協働的な授業改善のあり方を具体的に記述する。
- ⑦ 学力向上に効果的な学校評価や授業評価に関わる様々な評価手法を計画する。
- ⑧ 結果チャートと学力診断結果、そして授業改善のアイデアを一つの表にまとめることで、学力診断から授業改善・学校改善に至る一連の流れを見やすくする。
- ⑨ 前年度の子どもの学力実態や取り組み、今回の全国学力・学習状況調査の結果、そして今後の授業改善の方向性を関連づけて記載することで、学力向上のR-PDCAサイクルを確立しやすくする。
- ⑩ 必要かつ可能なところでは、次年度の学力調査に向けて達成したい数値目標を上げて、学力向上の取り組みの指針を具体化する。

このような書き方のポイントを見てみると、学力向上アクションプランは、「具体性」「継続性」「総合性」「協働性」「組織性」「公開性」という6つの特徴を実現したものでなければ、子どもの学力向上の成果は上げられないことがわかります。

その逆に、書き慣れないうちは、抽象的なスローガンを並べたり、どの学校でも取り組んで

いる簡単な手法だけを箇条書きにしたりしがちになるので注意が必要です。

## (2) 学力向上アクションプランの履行・修正・報告

さらにアクションプランの作成だけでなく、実施工程表の作成と履行状況の評価・報告までを行うことが大切です。

簡単にその流れを整理すると、次のようになります。

- ① 学力向上アクションプランの作成
- ② アクションプランの実施
- ③ アクションプランの修正案の作成
- ④ 初期プランの未実施部分の実施
- ⑤ 学力向上アクションプランの履行状況の評価と情報公開
- ⑥ 保護者や地域への説明と広報
- ⑦ 次年度への引き継ぎとより多くの教師と保護者の参加促進

毎年このような完璧な流れを踏むことは難しいでしょう。しかし、こうした明確なマネジメント・サイクルを実行することで、子どもたちの学力向上の成果を上げられるのです。

また、学力向上アクションプランに記入した具体的な授業改善や学校経営の改善に関わる方法に関しては、積極的に地域や保護者に公開して、自校の学力向上に向けた取り組みの努力、そしてその成果と課題についてしっかりと説明責任を果たすことが重要です。

学力向上アクションプランの作成と履行、そしてその継続的な改善は、そのための大きな手がかりとなるものです。

## (3) 学校の広報活動を活性化する

次に、学校が広く広報活動を通して自校の学力向上の取り組みのねらいと特色、そして成果について説明責任を果たすことには、次のような5つのねらいがあります。

- ① 自校の教育活動の方向性と成果について保護者と地域に理解してもらう。
- ② 保護者と地域から自校の教育活動について合意や賛同を得る。
- ③ 情報公開を前提として説明可能で優れた教育活動を行えるようにする。
- ④ 説明を受けて納得した保護者に学校参加や授業参画を依頼する。
- ⑤ 対外的な説明を行うことで、自校の教育の特色と位置づけを一層明確に自覚し教員の一層の力量形成につなげる。

これら5つのポイントに見られるように、学校の説明責任は、多くの学校運営の改善の効果を生み出すものなのです。

もちろん、今日の多忙で多くの課題を抱えた学校で、すべての教員が自分自身の教育活動について明確な説明責任と客観的な成果を求められることは大変なことです。しかし全国学力・学習状況調査のような客観的な学力診断を可能とする良質のデータが提供されているときに、それを活用しないままでは子どもの学力を十分に向上させることはできません。

#### (4) 学校が行う情報公開の方法

次のような6つの方法で、自校の学力向上の成果と課題について、学校安全やデータの扱いには慎重でありながらも積極的に情報公開に努めることが大切です。そのことが、教師や保護者、そして子どもたちの学力向上への意識と自覚を高めることにつながるからです。ただし、情報公開の原則や基準については、校長会や教育委員会とのコミュニケーションを密にしながら慎重に検討することが大切です。

- ① 学校ホームページでの解説
- ② 教育委員会への実施報告書の提出
- ③ 公開授業研究会の開催とそこでの説明
- ④ 学校のオープンデーでの資料配布
- ⑤ 学力向上パンフレットの作成と配布
- ⑥ 学校の研究紀要の作成と情報発信

なお各学校で全国学力・学習状況調査の自校データを公開する際には、次のような配慮事項を校内で確認しておきましょう。

- ① 教科学力の数値による結果の公表については当面は行わず、文章表記で課題と成果がわかるように工夫する。
- ② 児童生徒の学習状況(読書、生活習慣、学習習慣、授業規律等)については、慎重な判断の上で一部数値による公表を行い学校や家庭での努力目標にする。
- ③ 児童生徒の教科学習のあり方や教師の指導状況のあり方については、文章表記で成果と課題について公表するようにする。

## おわりに

このマニュアルは、全国学力・学習状況調査の結果を各学校が活用して、自校の授業改善と学校運営の改善を推進してもらうことをねらいとして作られました。そのねらいをよりよく達成するためには、この委託研究で開発したグラフ化システムが有効です。

マニュアルを通して、学力調査を用いた自校診断から授業と学校運営の改善を生み出すための手法を学んだあとは、このグラフ化システムの直感的なインターフェースに助けられながら豊かな発想と想像力で多くのグラフに触れ、自校のこれからの学力向上の取り組みの方向性を見いだしていただければ幸いです。

今後は、皆様からお寄せいただいたフィードバック情報をもとにして、このマニュアルも継続的に改訂を行い、より使いやすい、分かりやすいものへとしていく予定です。どうぞご協力くださいますよう、お願い申し上げます。

### [参考文献]

- 1 田中博之他監修『学力向上ハンドブック』ベネッセ教育研究開発センター、2007年
- 2 田中博之「学力調査結果のレーダーチャート化と自校診断・改善のスキル」『学校マネジメント』8月号、明治図書、2008年、pp.10-13
- 3 田中博之著『子どもの総合学力を育てる』ミネルヴァ書房、2009年
- 4 土屋隆裕著『概説標本調査法』朝倉書店、2009年



**グラフ化システム活用マニュアル**  
**Ver. 1.0**

平成 22 年 3 月

制作著作 早稲田大学 教授 田中博之  
統計数理研究所 准教授 土屋隆裕

